マーラーの歌曲集『さすらう若人の歌』（２）
―歌手とピアニストの為の演奏と解釈―

野々垣　文　成

1. はじめに

歌手とピアニストは演奏自体で評価されることが通常である。演奏する内容を文字化することは稀である。しかし演奏家たちの参考の一端となればとの思いであえて執筆している。今回は前回の続きでマーラーの歌曲集「さすらう若人の歌」第２曲について歌手とピアニストの為の演奏と解釈について論じたい。

第２曲『朝の野辺を歩けば』“Ging heut`Morgen übers Feld”

この曲はマーラーの第１交響曲「巨人」第１楽章で使われたテーマである。実際にはこの歌曲が原曲になっているのだが第１交響曲のオーケストラの壮大さ、曲の構築力の安定感等一般的には交響曲の方が有名になっており原曲歌曲の方が一般的ではない。それはリストのピアノパラフレーズ「愛の夢・第３番」と同じであろう。この「愛の夢・第３番」も原曲はリストの歌曲「おお愛して下さい、愛しうる限り」“O lieb,so lang du lieben kannst”である。一般的にはこの原曲の歌曲の存在さえも知られていないことが事実である。話をマーラーに戻そう。この曲全体的には朝の野原の美しさと自然を讃える明るく爽快な曲であると思われがちであるが第１曲目の『彼女の婚礼の日は』を奥深く引きずっている。歌詩の内容は以下のとおりである。第１節“今日の朝、野を行けば草の葉に露がしたたり陽気なウソ鳥が語りかける。「おはよう、いかがです。この世は美しいではないですか。なんて素敵なんだ。チュン　チュン、私はすっかり気に入りました。」”第２節“野に咲く釣鐘草もまた陽気に愛想よく挨拶をする。キンコン　キンコンと鐘を振って朝の挨拶を呼びかける。「この世は美しいではありませんか、キンコン　キンコン素晴らしい、とても気に入りました。」”第３節“そして朝の陽の光をうけてこの世が一斉にきらめき始め音と色で満たされている。花も鳥も、大きいものも小さいものも。「おはようこの世は美しい。そう、世界は美しい！ 今僕の幸せも再び訪れるのだろうか？ いや！ 幸せが僕の為に花開くことなどはあり得ない！」”と歌っている。詩の内容としてはかなりわかりやすい。前号で述べたようにマーラー自作の詩であり文豪たちの詩に比べればかなり素人っぽい。詩の結末部分は寂しげな自分に対しての幸福への懐疑に終っている。テンポはGemächlich（nicht eilen）=急がないと言う表示である。拍子は２分の２拍子でかなりゆったりとしたテンポであろう。常々述べているのだが声種によってもかなりテンポの違いは出てくる。♩=80位であろう。ピアノパートは透明感のあるすっきりとした音色で弾きたい。第１小節目から声部が入る３拍目までの部分でピアニストは第１曲とは全く違う境地を醸し出さなくてはならない。しかもこの音型はB（♭シ）のオクターブのみの音で構成されている。ピアニストはこの３拍で第２曲全体の暗示を聴衆に与えることはかなりむずかしい。イメージをつかむ必要がある。この音はスタカートがかかり春の息吹と春の喜びを感じる胸の動悸であろう。そして当然若者の軽やかに歩いているテンポでもある。情景は遠く彼方から到来する春の息吹と若者がその季節を味わって遠くから散歩してくる様子であろう。第２小節目２拍よりメロディーが始まるのと同時にピアノパートの左手部分（└────）がメロディーと並奏し始めている。これは明らかに若者の気持ちが第１曲から離れた状況をピアノパートが増幅しているのである。ピアノパートの左手部分はメロディーよりも出しすぎてはいけない。若者のまだ頼りない立ち直りに対しての支えである。メロディーはGing heut Morgen über`s Feld,と歌いだすのだが第３節まで（第８小節）それぞれ１節ずつ方向性を持って歌わなければならない。(→)こ

のそれぞれの節の音型は若者がなだらかな草原を歩いている様子を表現している。カッセル周辺は北ドイツに含まれるのだが特に丘陵が多く草原が美しい地域である。ピアノパートの音型もまさにそのとおりである。第11小節目からは若者の朝のすがすがしい気分を言葉に出している。ピアノパートのA（ラ音）は教会の鐘、釣鐘草が風に吹かれて鳴っている情景である。第12小節からWird`s nicht eine schöne Welt （この世はなんて美しいではないですか）とSchöne Welt を２度繰り返している。若者の忌まわしい過去とは全く無関係な美しい世界に対する賛美がこの部分に強く感情表出されている。歌手はやはり方向性を持て（→）一気に歌い上げる。schöne Welt? Schöne Welt?は１度目よりも２度目の方を感情的に歌いたい。しかしあくまでオペラチィクに歌うことは避けなければならない。そして日本人の歌手にとってöはüと同じように歌うのが特別に難しい発音であることはすでにドイツにて学んだ歌手であれば良く理解しているはずである。必ず閉口にして声帯を引き上げ、後ろに声が引っ込まないように演奏しなければならない。この部分は歌手にとって第１節の聞かせどころの導入となっている。第17小節目からピアノパートの情景は風景から突然鳥の鳴き声に代わる。Zink! Zink!（チュン、チュン）と鳥の鳴いている描写がある。（第19，20小節）若者はもう一度第１節の頂点に上りつくすための箇所に入る。Schön und flink!（第21，22小節）（美しく饒舌に鳴いている。）この部分legartissimo（もっともなめらかに）に歌わなければならない。その声の勢いで第22～24小節目の第１節の頂点に到達するのである。Wie mir doch die Welt gefällt!（私はこの世界が気に入った）の部分である。歌声部のみではなくピアノパートにも目を向けてみよう。第17小節からは自然描写がはっきりしてくる。右手のパートの上下の動きは自然の風の動き、鳥のさえずり、陽光の輝きが同時に表現されている。この部分はピアノではなくオーケストラでの演奏の方が如実に伝わってくるしそれぞれの部分がはっきりとしている。第25小節目からの間奏がピアノパートの第１節の頂点である。第25小節目からの右手の音の動きに注目をしたい。（○印）（レ），Es（♭ミ），E（ミ），F（ファ）と順次進行している。ここにクレッシェンドを掛け第28小節まで音楽を高揚させていく。第29小節の第１拍目が最大の頂点である。この世の全ての鳥たちが一斉に鳴いている様子を表現している。オーケストラの演奏であれば端的な表現に結びつくのであるがピアノでこれだけの音数での演奏はかなり難しい。丁寧に力まなくよく響く音で大空や草原、木々の梢で軽やかに鳴いている鳥たちを聴衆に思い描かせなければならない。ピアニストにとってはかなりの力量を要するであろう。表現過多に演奏すれば力み、音色が汚く透明感が薄れてしまう。第２節に移ろう。第２節は第１節とほとんどが同旋律を歌っている。“野辺に咲く釣鐘草もまた陽気に愛想よく挨拶をする。キンコン，キンコンと鐘を振って朝の挨拶を呼びかける。「この世は美しいではありませんか、キンコン、キンコン素晴らしい、とても気に入りました。」第２節では野辺の釣鐘草からの若者に対する。語りかけである。第45小節からのピアノパートは第１節の第17小節からと同様のパターンで書かれている。歌声部は同じ個所に変形された音型で表現されている。前述箇所は鳥の鳴き声（擬声音）（第19，20小節）であったがこの箇所では“キンコン、キンコン”と（第47，48小節）釣鐘草の風に吹かれている描写である。ここはA（ラ）音で書かれているが歌手は精一杯の声で歌ってはならない。草花である釣鐘草が風に吹かれている様子の表現である。強風、突風の類の表現にならない様、歌手はよく頭声に抜けた声でさらっと歌いたい。ドイツ語としてはiの発音で音符に乗せている。iはa,e,i,o,u,の全ての発音の中で一番声帯を薄く尚且つ引っ張って発声する発音であるので作曲者マーラーは理にかなった作曲をしている。ただし歌手としては発声法が的確に身についていなければむしろこの発音と音型があだになってこの箇所の為に第２曲全てを壊してしまうことになる。特に日本人の我々はiの発音を薄く持っていない民族であるので特に難しい。日本人はiとeの区別がつきにくくほとんどがeでしかも開口して歌ってしまうのが致命的である。iはあくまでiでありeとは全く違った発音であり混同してはならない。第51小節目からはcon allegrezza（やや速く）と表示されている。この部分は第１節の同部分に比べると

音型は一緒であるが第１節部分は上向していったのにかかわらず第２節では下降している。これは作曲技法上第53小節の“Heiah!”感動詞に持っていくためのテクニックである。この部分は歌手の感性にて感動的に表現するべきである。ピアノパートについては前述している第25、26小節と右手の動きは同一であるが第56小節に入っていく盛り上がり方は別である。第56小節のffに持っていくためにはピアニストは同じ感性で演奏してはならない。しかしこの山は瞬間的な爆発であって音楽はすぐに萎え間奏として次の部分に移行していく。第56小節２拍目裏拍（○印）の音からは音色にかなり強い変化を与えなければならない。この間奏を演奏中にAllmählig in ein sehr gemächliches Tempo einlenken（次第にゆったりとしたテンポに変えていく）と指示がされている。これは経過部にのみ課された指示である。この指示ははっきりとしたテンポ指示ではないので演奏家の感性によって決まっていく。歌手が今まで歌ってきたテンポによって自ずと決まってくるのであるが両者（歌手とピアニスト）の音楽的くいちがいによってちぐはぐになることも結構あるので両者の意思疎通は不可欠である。音色の変化は当然薄く透明度を増したPの芯のある響きでなければ聴衆は納得できない。第61小節は経過部の経過部であると解釈するとさらにスムースに第62小節からの第３節に美しく移行できる。第３節前半の歌詞は“そして朝の陽の光をうけてこの世が一斉にきらめき始め音と色で満たされている。花も鳥も、大きいものも小さいものも。おはようこの世は美しい!”第64小節からはNoch etwas langsamer（前よりももう少しゆっくりと）との指示がある。これは経過部との比較ではなく第１．２節部との比較である。音楽はさらに自然に対する賛美、畏敬の念を表現している。音楽はのどかなほのぼのとした表情にとはっきりとした変化を見せている。ピアノは更に柔らかく陽光を浴びているすがすがしい透明感のある音色が求められている。声部はPPからPPPPにディクレッシェンドが掛かっている。（第66小節）この強弱記号の演奏は歌手にとってもピアニストにとっても至難のテクニックである。ピアニストは弱音ペダルを使用するのであるがあたかも自然に音が弱音になるように演奏したい。声部に関してはG音（ソ）という高音であるために弱く演奏するどころか叫びがちになるか、詰まり声になってしまう。メッツァヴォーチェ（弱声）の最たるところのテクニックを必要とする。まさに歌手にとっての最もの力量を見せるところである。しかし残念なことに日本の現実では聴衆は強声を主に聴く習性があるために歌手の努力の多くは報われない。第75小節からは音楽が再び動きを持って色づき始めている。第75，77小節のアクセント（∧）は重く強くという感じではなく言葉の強調と弾みと表現であう。第１節に出て来ている個所とは表現は異なるので混同は禁物である。第75，77小節と交差している第76，78小節はレガートである。各小節によって止め、進めの表現がはっきりすると音楽はより生き生きとしてくるであろう。第82小節からはレジェーロ（軽く動きがある）の音型になってくる。第98小節まではメッツァヴォーチェ（弱声）で歌い切ることである。第97小節目裏拍（○印）からはピアノパートは３連音符になっている。これはmolt riten.（大変ゆっくり）の表示通りにリズムの刻みではなく音型の自然な変化に対する手段であるのでリズム的な演奏ではなく感性的な演奏の方を重視するべきである。このピアノの音型は今までの自然への謳歌、賛美に対し若者の心の変化に移行している部分である。若者はここで自分の置かれた境遇を思い出し第１曲の思いに心が戻っていく肝心な部分である。ひたすらにただ感傷的な思いで演奏してはならない。前述の２回の間奏部分とは全く扱いが違い、又若者の心理的変化の移ろいをはっきりと表現したい。聴衆がすぐに察知出来る演奏表現を演奏家は強いられる。ピアノパートのリズム変化は若者の歩く速度の変化を表している。この歩行速度の変化は当然若者の心の変化に結びついていることは明白である。若者はすがすがしい快速な歩行から失恋の痛手を思い起こしている。音楽は第２曲中を支配している音型からは離れず第１曲に表現されている失意の心に戻る感情に直接訴えている。第103小節からはSehr leise und langsam（大変静かにそしてゆっくりと）と言う表示がある。歌手もピアニストもかなりの弱声、弱音で最後まで演奏しなければならない。歌詞は“今僕の幸せも再び訪れるのだろう

か”と2回繰り返して歌っている。歌詞のmein（僕の）の部分にアクセント（その音を特に強く）（☆印）がついている。これは作曲者マーラーが特に心理的効果を狙って付けている。このアクセントは前述したような意味で考えてはいけない。歌詞と作曲上観点からみればmein にではなくGlück（幸せ）に付くのが当然であると考えられる。しかしmeinに着けたということは世の中に僕一人が不幸であることを強調している表現である。第2曲全体を支配している幸福感と若者の心の描写を効果的かつ対照的に表現しているところは秀逸である。第1回目の節（第103～105小節）より第2回目の節（第108～110小節）の方が4度上がっている音型になっているが演奏指示はinnig（内的に）が書かれている。歌手にとっては音型が上がれば音量が増すと考えがちであるが気持ちを引きずりながら更に弱声で演奏する困難さを十分に自覚しなければならない。ピアノパートを見てみよう。この部分においても若者の気持ちの重さを十分に反映している。第105，106小節目は若者の心の痛みを反映している。演奏はnon legarto（ノンレガート）（音をレガートとスタッカートの間で）になっている。そして第110，111小節目は同じ音型を使っているのだがtenuto（テヌート）（音を保って）に変化している。若者の後ろ髪をひかれる思いを見事に表現している。歩行速度もかなり落ち足を引きずりながら歩いている様子が目に浮かぶ。第112小節から第114小節にかけては再び若者の気持ちは第1曲目のどん底に連れ戻されている。ピアノパートもメロディーもppp（かなり弱く）を保たなければならない。ピアニストは体も腕も指も硬直してはならない。脱力した自然な音で痛々しいまでも若者の心を最後まで表現したい。歌手はピアノに乗ってメッツァ・ヴォーチェ（弱声で）で音色をしっかり変えてやはり最後まで歌わなければならない。第115小節目で若者は自問した答えを出している。Nein! Nein!（いや、いや）と音量は弱いが強く否定している。最後の歌詞は“幸せが僕の為に花開くことはありえない”第119小節目のA（ラ音）は声楽家泣かせである。これはドイツ語に不慣れな外国人（特に日本人）にとっては不可能な音使いである。しかしドイツ語と発声法の関係では理に適った作曲法である。それはi音は母音の中で最も薄く引っ張りを要求されている発音であることが理由である。日本人はi音をe音と混同していることが多い。i音の発声が出来なければe音を代替えに発声させることが現在でも多くみられる。i音はあくまでi音であり他の母音の混同は許されない。多くの歌手たちはテクニック不足のため、このpppの部分をff（大変強く）で演奏している。これはこの歌曲を歌う資格がないことの象徴である。最後の後奏の4小節はテンポを最初に戻し若者の心とは別にのどかな朝の陽光情景描写に戻って静かに第2曲を終わっている。

No. 2.

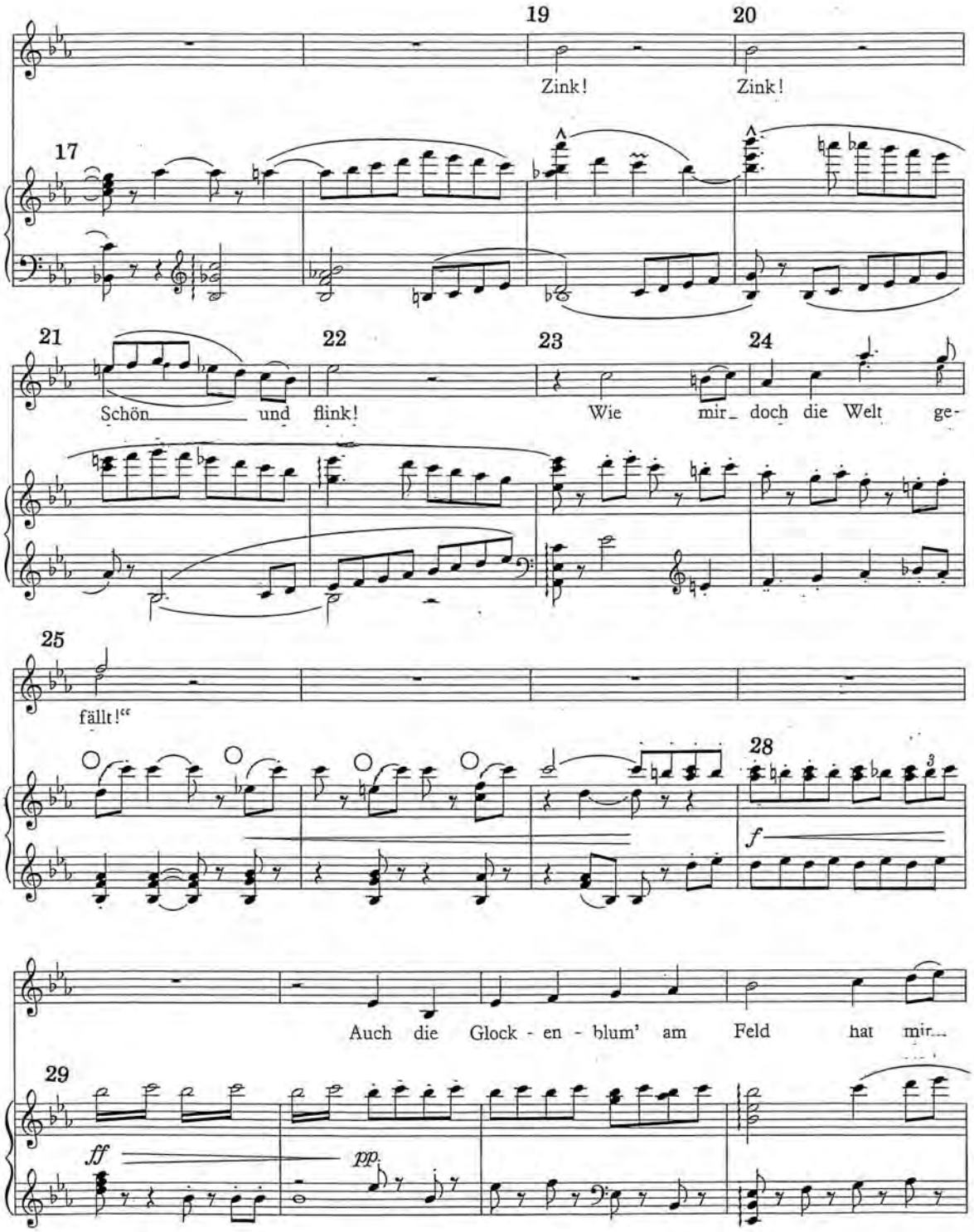
Gemächlich *(nicht eilen)*

Voice

Pianoforte

p *dim.* *pp*

2. Ging heut Mor - gen ü - ber's Feld, Tau noch auf den Grä - sern hing sprach zu mir der lust' - ge Fink: „Ei, du! Gelt? Gu - ten Mor - gen! Ei, Gelt? Du! Wird's nicht ei - ne schö - ne Welt? Schö - ne Welt?


19
20
Zink!
Zink!
17
21
22
23
24
Schön und flink!
Wie mir doch die Welt ge-
25
fällt!“
28
f
Auch die Glock - en - blum' am Feld hat mir
29
ff
pp

lu - stig gu - ter Ding', mit den_ Glöck - chen, klin - ge, kling, klin - ge_

kling, ih - ren Mor - gen - gruss ge -

pp

schellt: Wird's nicht ei - ne schö - ne Welt? Schö - ne Welt?

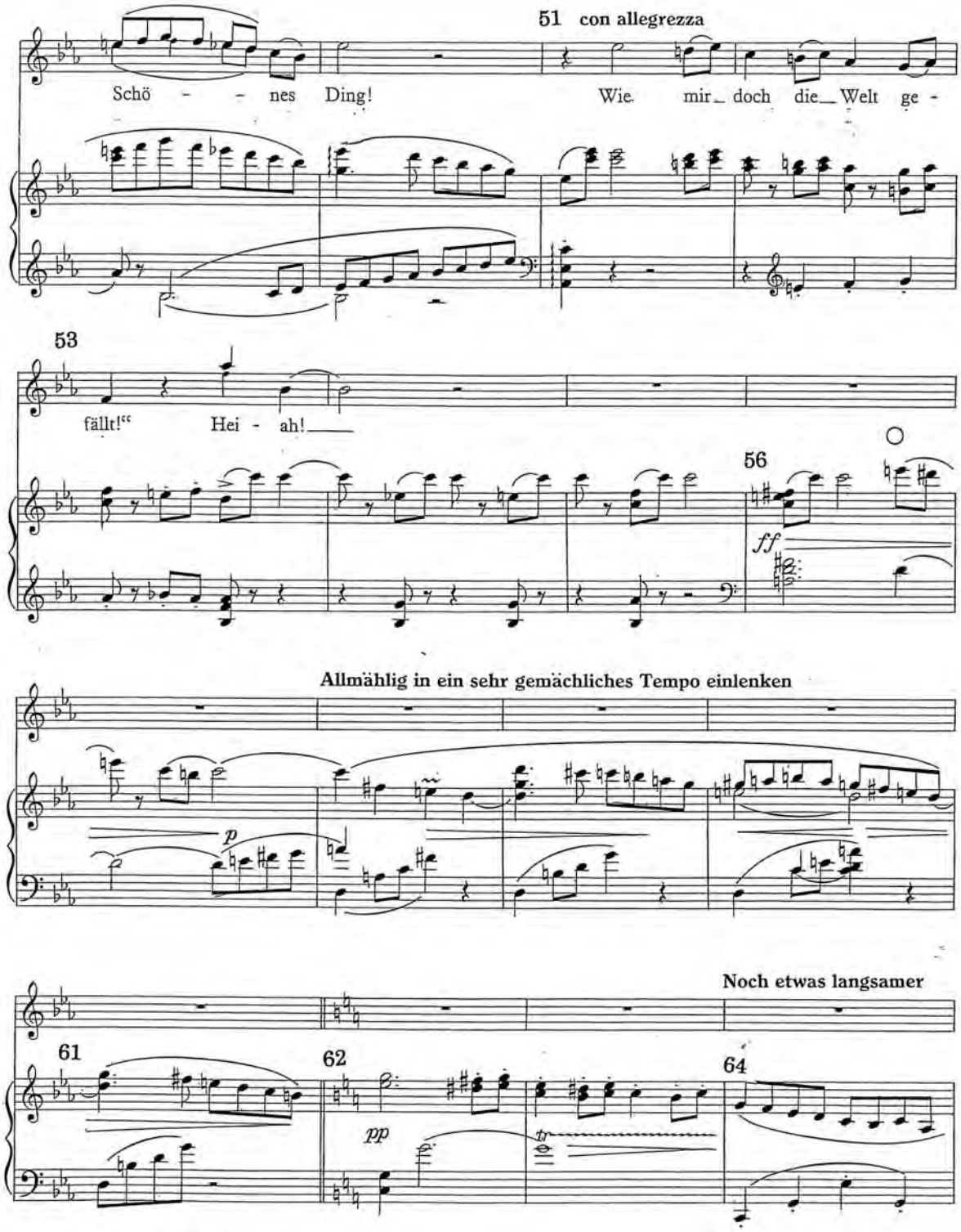
f

cresc.

47 48

Kling! Kling! Kling! Kling!

45


51 con allegrezza
Schö - - nes Ding! Wie mir doch die Welt ge -
53
fällt!“ Hei - ah!
56
ff
Allmählig in ein sehr gemächliches Tempo einlenken
p
Noch etwas langsamer
61
62
pp
tr
64

pp　pppp　ppp

Und da fing im Son - nen schein

gleich die Welt zu fun - keln an;

p

Al - les, Al - les, Ton und Far - be ge - wann! Im

L.H.

Son - nen - schein! Blum' und Vo - gel, gross und klein!

Gu - ten_ Tag! Gu - ten_ Tag! Ist's nicht

pp

ei - ne schö - ne Welt? Ei,_ du!_ Gelt? Ei_ du!_ Gelt?

Schö-ne_ Welt!

molto riten.

97 98

molto riten.

103

Sehr leise und langsam

„Nun fängt auch mein Glück wohl

pp

105

an?!

innig

Nun fängt auch mein Glück wohl an?!

110

115

Nein! Nein!

111

ppp

119

ppp

Das ich mein', mir nim - mer, nim - mer blü - hen

kann!

Tempo I

ppp

The Mahler Song Cyeles“Eins Fahrenden Gesellen”Vol.2
―Performance and Interpretation for the Singer and Pianist―

Nonogaki, Fumishige*

声楽の分野では演奏が全てである。その演奏の助けとして歌手とピアニストの為の演奏法の解釈、分析が必要であり重要となってくる。現在、声楽の分野ではそのような文献がまだ不十分である。特にその中でもドイツ歌曲の分野では世界で最も優れている詩人の作品に才能ある作曲家が曲をつけていることでも知られている。筆者自身ドイツ歌曲専門の歌手であるため、ドイツ語圏の最高の芸術作品であるドイツ歌曲の演奏法と解釈に注目している。

キーワード：グスタフ・マーラー，さすらう若人の歌，歌曲集

**Nagoya Ryujo Junior College*